



# 背温



遥佳

北條の背中。そこが、あたしの特等席。

読み終えた本を本棚に戻した。そのまま、座卓に向かって本を読む北條の真後ろに膝を抱えるようにして座ると、背中に寄りかかった。

「何だよ西野」

「ひま」

「俺は本読んでるの」

読んでる本から視線を離しもしない。

「さっさと読み終わいなさいよ。次あたしが読むんだから」

「横暴だ。あ、ドーラ裏切った」

「ネタバレすんなばか。しね」

もたれた北條の背中に、思い切り体重をかける。踵で体を支え、腰を浮かせて。

「いだだだっ！ 痛い痛い！ つーか重い！ 潰れるからっ！」

「きさまっ。乙女に向かって何て事言うのよ！」

「あのなあ乙女はきさま何て言わな……いだだだっ！ 俺が悪かった！」

その叫びに、あたしはにまりんと笑う。

「よーし。許してやろうじゃないの」

力を抜いて腰を下ろすと、北條はほっとしたように息をついた。机の縁に押しつけられていた胸の辺りをさすっている。いい気味だ。

「あーもーわかった。俺がまだ手をつけていない氷川清音の新刊を先に読ませてやろう」

「やった」

北條から新刊を受け取り、ほくほくと頬をゆるめる。

「その代わりに、俺の読書の邪魔すんなよ」

「わかってるってば」

そんな日常が、あたしと北條の関係。

+ + +

「<sup>あや</sup>ね一彩。北條の家で何やってるの？」

「何って、本読んでるだけよ」

友人の問いに正直に答えると、うそお、と返された。まったく、こんな事にうそなんてついてどうするのよ。

「ほんとに、あんた達付き合ってるんじゃないの？」

「だから、北條は普通に友達だから」

ありえない、という叫びは無視した。

あたしと北條は別に彼氏彼女なんかじゃない。同じクラスで、よく一緒にいるだけの、ただの

友達。それ以上でもそれ以下でもない。北條の家に行くのも、あいつが持っている本を読みに行ってるだけの事。北條は北條で、自分の持ってる本か、あたしが貸した本やマンガを読んでいるくらいで、会話なんてほとんどない。そこで何が起こるって言うんだらう。

でも、周囲にとってはあたし達の現実なんてどうでもよくて、うわさばかりが一人歩きしているのが現実だった。

放課後、いつものように北條の家に行く。まあ今日は北條に、絶対来るよな、と念押しされてはいたんだけど。

隣を歩く北條は、考え事でもしているのか、どこか上の空だ。会話がいないのはいつもの事なので、気にせずに歩き続ける。

おじゃまします、と言って家に上がり込み、そのまま北條の部屋に直行した。今は高二の十一月頭で、初めて来たのは高一の六月頃だったから、一年半近く経った今では遠慮もない。

北條の部屋で好きなどころは、本がたくさんあるところと、畳敷きなどころだ。あと、意外にも片付いている。あたしの部屋よりも綺麗なあたり、ちょっとむかつく。

いつもなら、北條はそのまま座卓に向かって本を読み出すのに、今日はあたしの方を向いて座布団に座った。あたしも何だか合わせなくちゃならない気がして、半ば専用とかしている座布団を引っ張って、正面で正座なんてしてみる。

「何よ」

「いや……何で言うかさあ」

言いくくそうに、北條は後ろ頭を搔いた。一体何だって言うのよ。

「……なあ、西野。浅井さよ、って知ってるか？」

「隣のクラスの可愛い子でしょ。彼女がどうしたの？」

北條の口から女の名前が出てくるなんて意外だ。興味なんてないと思ってたのに。それどころか、あたし以外に友達がいるのかも怪しい。

言っても、あたしが浅井さんの事を知っていたのは、体育が一緒だからだけ。周囲にあまり興味がないのは、あたしも北條とあまり変わらない。まあ、あたしには他にも友達はちゃんというけど。

「なんて言うか、……告られた」

胸の底が、ざわついたような気がした。

まさか、こいつに？ 冗談かと思ったけど、北條はわざわざそんなうそをつくようなタイプではない。世の中には、物好きもいるものだ。

「へー、そう」

「返事は明日でいいんだって。それでさ——」

続く言葉を予想して、あたしは立ち上がった。

「帰るわ」

「ちょ、待てよ！」

「待たない」

北條が伸ばしてきた手を振り払う。

「あたしにどうしたらいいか聞くつもりなんだろうけど、嫌よ。これは北條の問題なんだから、あんたが考えないと意味ないの」

「でも、俺そんなのわかんねえし」

口をとがらせて、すねた子どもみたいな口調。我慢の限界だった。

「だからこそ考えなさいって言ってるの。何なの？ あたしが付き合えって言ったら付き合うの？ 付き合うなって言ったら振るの？ あんたがそんなんだから、あたしとあんたが付き合ってるなんてばかげたうわさが流れるのよ！」

北條はばかみたいにぱかっと口を開けた。本気で知らなかったみたいだ。

「そーなの？」

「そうなの！」

一体何度、色んな人に訊かれたらろうか。

「とりあえず、ゆっくり自分で考えなさい。あたしに聞いたって、何も解決しないんだから」

北條の部屋を出て、襖をぴしゃりと閉めた。

+ + +

「浅井と付き合う事になりました」

「そう」

翌日の放課後。いつもの帰り道。北條の報告に、淡々と頷いた。分かれ道で立ち止まる。

「じゃ、あたしこっちだから」

「え？ 家寄らないの？」

本気でびっくりしたような声に、びっくりした。

「寄らないわよ。寄れるわけないでしょ。あんたほか？」

「何で？」

首を傾げた北條に、がくと肩を落とした。コイツ本気だ……。

「あのね、今やあんたは彼女もちなの。他の女が彼氏の家に入り浸ってたら、彼女が嫌がるでしょ」

「そーゆーもんか？」

「そういうもんなの！」

首をかしげ、それから何かに気付いたように頷いた。

「そういや、西野って女だったんだよなあ」

「……しばくわよ、あんた」

何それ。

湧き上がってきた苛立ちを、握りしめたこぶしと共に押し殺した。

「じゃあさ、次はいつくる？」

「……そうね。あんたが振られたら、笑いに行っておあげるわ」

吐き捨てるように言って、足早に立ち去った。

+ + +

授業と授業の合間の休み時間。彼女の姿にいち早く気付いたのは、誰にでも馴れ馴れしいクラス  
の男子だった。

「おい北條。彼女が来たぜ」

そんな冷やかしの言葉にも全く動じず、北條は立ち上がった。浅井さんの方が赤くなっている  
。

「どうしたんだ、浅井」

「あのね、北條君。古典の教科書持ってない？ 忘れちゃって……」

「あーごめん。俺今日授業ねえし持ってねえわ。……あ、そーだ。ちょっと待って」

振り返った北條と、ぱっちり目が合った。

「なー西野。お前古典の教科書持ってねえ？ 色々置き勉強してるだろ」

「その言い方だと、あたしが手ぶらで学校来てるみたいじゃない。ちゃんと持って帰ってる  
わよ！」

置き勉強しなきゃいけないのは、あんたに貸すための本が重いからじゃない！

言いかけた言葉を、何とか飲み込んだ。これは今言うべき言葉じゃない。立ち上がって教室の  
後ろまで移動し、ロッカーを開けて教科書を引っ張り出した。

「……まあ、丁度古典なら持ってるけど。はい」

「あ、ありがとう」

「返すときは、北條に渡してくれればいいから」

それだけ言って、目を合わせる事もせずに、逃げるように自分の席に戻った。読みかけの本を  
開く。

近くで見た浅井さんは、やっぱり北條なんかにはもったいないくらいに可愛い。本当に、あんな男の  
どこがいいんだか。

少しだけ本から視線を上げると、北條と幸せそうに喋る浅井さんの姿が見えた。

ちょっと、彼女にそっけなくしすぎただろうか。

体育の時間。今日はバスケットボールの試合だった。

一試合終えて、コートの外に出た。空気は冷たいが、額には汗がにじむ。ジャージでは暑いくらいだ。  
肺が痛い。膝に手をつけて、軽く息を整える。

「あの、いいかな？」

声をかけてきたのは、浅井さんだった。声のでなかったあたしは、ただ頷いた。

コートの外に並んで座る。膝を抱えた彼女はさらさらの髪を片手で梳いた。汗をかいた様子もなく、  
爽やかな匂いがしそうだ。

「北條君と西野さんって、付き合ってたの？」

「はあ？」

酸素が足りていなかったせいかな、言われた事が理解出来なかった。

いや、言われ慣れてた言葉ではある。でも。彼女の口から言われると、重みが違う。

無意識に髪をかき混ぜようとして、うなじで一つにまとめているから出来ない事に気がついた

。

「だって、北條君と西野さんが仲いいって話、よく聞くから。付き合ってたのかなって」

「違う！ あたしと北條はそんなんじゃない！」

思いがけず大きな声が出て、びっくりした。浅井さんも、目を丸くしている。

落ち着こうとして、あたしは一度深呼吸をした。

「……北條とは友達だけだから。付き合うとか、ありえないし。……浅井さんが嫌なら、あたしは北條に近づかない」

それでもまだ不安そうにしているから。

「浅井さんは可愛いわ。北條には、もったいないくらい。だから、自信を持って。元々、言葉の足りないやつなのよ。はっきり言わないと、何も伝わらないし。悟ってくれるなんて思っちゃ駄目よ」

何で、こんな事を言っているんだろう。そうは思いながらも、浅井さんが明るくなってくれるなら、それで良いと思った。そうすれば、あたしの心もまた軽くなる。

「……西野さんは、北條君の事が好きなの？」

「友達として、なら嫌いじゃないわ。でも本当に、それだけだから」

「そう……よかった」

両手で顔を覆うようにして、浅井さんが笑った。それだけで、少し肩の荷が下りた気がする。なのに。

顔を上げた彼女の目を見た瞬間、嫌な気はした。

「……ごめんなさい」

申し訳なさそうに、浅井さんは言った。

どういう意味？ 問い返しかけて、結局やめた。

疑ってごめんなさい？ それともー 北條を取ってごめんなさい？

試合終了のホイッスルがなる。あたしは答えを返さずに、次の試合に出るために立ち上がり、コートに駆け込んだ。

放課後。あたしは掃除当番なので、箒を手に教室の床を掃いていた。

北條は、机に腰掛けて本を読んでいる振りをしている。さっきからページがぜんぜん進んでいないのはバレバレだ。話しかけたがっている事はわかっている。でも、浅井さんと約束したばかりだから、反応するわけにはいかない。

視線が合いそうになるたびに、目をそらした。それでも、北條がこっちをじっと見ているのはわかった。も一何なのよ！

たたん、と軽い足音。軽く息を切らせた少女の姿。浅井さんの登場に、ほっとした。

「ごめんね、北條君。友達と喋ってたら、遅くなっちゃって」

「いいよ、気にしてないから」

北條は笑いかけると、読みかけだった本にしおりを挟んで閉じた。机から飛び降りて、鞆を手に取った。浅井さんの隣に並ぶ。

「じゃあな、西野！」

ぼっちり目が合った。にっと、笑っている。ここで名指しにされて、挨拶を返さないのも変だ。

「……はいはい、サヨナラ」

浅井さんが、また不安そうにこっちをじっと見ている。視線が痛い。突き刺さってくる。

あのばか。

箸を握る手に、力をこめた。そうでもしないと、叫んでしまいそうだった。

自分の部屋で、携帯電話を開いた。もう夜中に近い時間だけど、この時間ならまだ起きているはずだ。学校では近付かないと約束したから、これくらいなら、彼女も許してくれるだろうか。

「ちょっと北條。彼女を不安にさせるってどういうことよ！」

昼間の怒りをぶつけるように言葉をたたみかける。初めは反論する意志を見せていた北條だけど、途中からは黙って聞くばかりになった。

「ほんとに、いつも言葉が足りないんだから。ちゃんと正面から向き合いなさいよ。言わないと、通じないの」

『……わかった。努力する』

北條の口からそれだけ聞くと、あたしは通話を切った。

それからは、北條はあたしの事を見なくなった。

望んだ結果じゃない。これで、清々したわ。

自分の部屋で、買って来たばかりの新刊を開く。背中を預ける壁が、冷たかった。

＋　　＋　　＋

ひとつき

北條と浅井さんが付き合い始めてから、一月ほど経ただろうか。翌週に期末テストを控えた日曜の午後。形だけ机に向かって教科書を開いていたあたしは、携帯電話のコールに顔を上げた。

表示された北條の名前に、あたしはしばらく躊躇った。でも、いつまで経っても鳴り続けるから、仕方なく通話ボタンを押した。

『あのさあ、西野一』

「どういう事よ!？」

約一月ぶりの、北條の部屋。この一月で増えた本で、本棚が前よりも少しだけ埋まっている

けど、それ以外には何も変わっていない。彼は部屋の中の定位置で、一月前と同じように、座布団の上で正座をしていた。

「まあ座りなさいよ」

「何なのよ、その喋り方」

妙な脱力感を覚えて、あたしは北條を睨みつけた。

『浅井と別れた』

そんな電話がかかってきたのは、つい三十分ほど前のことだ。

『だからさ。家に来ねえ？』

頭よりも先に体が動いた。とにかくコートを引っ掛け、自宅から駆けだしていた。

「なんで」

「言っただろ。別れたら、来るって」

けろりとした顔。どこかすっきりしてさえている。それまでこらえていたものが、ふつふつと溢れ出した。

「—っ、ばっかじゃないの！ ばかだばかだとは思ってたけど、やっぱばかだったわ。勿体無い。あんたに彼女が出来るだなんて、こんなチャンスもう二度とないかもしれないのに！」

「それはさすがにひどくないか？」

別れた事を伝えただけで満足したのか、両足を投げ出して、北條はあたしを見上げている。

「そういや、西野の私服姿って初めて見た」

「うるさいばか！ 今そんな話してないでしょ！」

ずっと握りしめていた携帯電話を北條に向かって投げつけた。うわっ、と言いながらも、両手で掴みとった。

急に力が抜けて、あたしはその場にしゃがみ込んだ。膝を抱える。北條が恐る恐るといった感じにあたしの顔を覗き込んできた。

「……笑うんじゃないの？」

「……笑えないわよ」

笑えるわけがないじゃない。

「……浅井さん、すごく可愛かったのに。すごく、いい子で、あんたの事大好きだったのに」

「うん、そうだな」

それだけはちゃんと理解していたようで、何だかほっとしてしまった。

話を聞きながら、北條はぐしゃりと髪をかき上げた。何か言いたい事を我慢しているときのくせだ。

「……浅井にさ、遠いって、言われたんだよな」

— 一緒にいるのに、本ばかり。北條君はいつもそこにいるだけじゃない。私に興味はないの？ ちゃんと私のこと好き？

「普通、って言ったら泣かれた。んで、もう別れようって」

「そりゃ、あんたが悪いわ」

「本音で向き合えって言ったのは西野だろ」

じゃあ何で付き合う事にしたのよ、と怒鳴りかけて、北條の事だから断る事も面倒だったんだろうと思い至った。そうだ、こいつはそういう男なのだ。自分がどうでもいいと思った事は、どこまでもどうでも良くて。そんな北條が、あたしの言葉をちゃんと覚えていた事の方が驚きだ。

「だって、お前というほうが、気い使わなくていいし、楽だから。西野といれないなら、俺は彼女なんていなくていいや」

だってよー、と語尾を延ばした。

「彼女がいるから友達と遊べないなんて変だろ。挨拶もしちゃだめとかさ。意味わかんねえ」

「ガキ」

つぶやいたら、ハイハイ俺はガキだよ、と北條は笑った。

「それに俺、あんまり可愛いとかわからないんだよね。好きか嫌いか、どうでもいいかでしか人を判断できないから」

つまり、普通だった浅井さんは、北條にとってどうでもいい存在だったという事で。浅井さんは、何て嫌な男に引っかかったんだろう。

「……多分さ、俺には西野くらいが丁度いいんだよ」

どういう意味、と聞きかけて、聞くだけ無駄だと口をつぐんだ。友人としては、最高の言葉で。愛の告白なんかをされるより、よっぽどたちが悪い。

そこでもう観念してちゃんと座布団に座った。

「なー、西野。俺って遠い？」

「そうね。本読んでる時は、たまにあたしの存在も忘れるし。いつつも自分の世界の中、って感じだし。ー でも」

聞いてない時はほんとに聞いてないし、会話が面倒になったりすると平気で黙り込むし。

でも。

「あんたは、ちゃんとそこにいる。それでいいんじゃないの」

自分の世界が何よりも大切に。どうでもいい物はほんとうにどうでもよくて。そんな北條があたしの事を気に留めていたのだ。それだけで、十分に特別な事で。

「……蒼天シリーズの新刊、あるけど」

「読む」

跳ねるようにして立ち上がり、本棚から目的の本を抜き出した。北條もすでに机の上に置いていた本を読み始めている。

座布団を手に北條の背後に移動して、そのまま背中にもたれかかるように座った。壁みたいに硬くないし、適度に温かい。

「あ、そうだ。その場所は、お前だけだから」

背中越しに、声が響く。くぐもっていて、不透明で、どこか心地よい。

「浅井にも、貸してないから」

「何それ」

首をそらすと、ごちん、と思いのほかい音でした。二人してしばらく畳の上でのた打ち回る

。

止まるとふと北條と目があつた。両腕で頭を抱え、痛みに目が潤んでいる。微妙に顔が赤い、ような気がする。

「わ、笑うなよ」

「笑ってないわよ」

「いや。ぜって一笑ってるから！」

あーもー、とうめくような声を出しながら、北條は両腕で顔を覆った。面白い。

うそをつくのも面倒くさがるような男だから、ほんとの話で。

顔はそう悪くないのよねえと胸の内で呟いてみる。笑うと、それなりに人好きするし。それがあたしの好みかどうかは置いといて。

ひとしきり笑って、それから、ここ一月まともに笑っていなかった事に気がついた。ゆっくりと、起き上がる。

学校で避けたのは、やり過ぎだったかなあと思う。だって、彼女が出来ようと、あたしと北條が友達である事には何の変わりもなく。それでも、北條は無自覚が過ぎたとは思うけど。流石に家に行くのはダメだけど、普通に喋るくらいはしてもよかったんじゃないだろうか。

「……仕方ないわね。借りといてあげるわよ、あんたの背中」

「うん」

頷いて、北條も起き上がった。もう、いつものよみにくい顔色だ。正直者なのにわかりにくいって、本当に面倒な奴だと思う。

北條の背中に寄りかかる。どれだけ文句を言っても、結局はちゃんと支えてくれるから、安心して寄りかけられる。それは北條も同じなんだろうか、なんて。

きっとこの背中合わせがあたし達に相応しい距離なんだろう。一番近くて、遠い場所。恋人同士にはむかない、顔が見えなくても、何でもわかる距離。

この座布団には、もうしばらくあたし専用でいてもらおう。特等席の、印として。